

『方丈記』の受容

—夏目漱石の『英訳方丈記』をめぐって—

ゴウランガ チャラン プラダン

総合研究大学院大学 文化科学研究科 国際日本研究専攻

要 旨

『方丈記』は成立して間もないころから、様々な視点から多くの作品の中に受容され、連綿と関心が注がれ続けてきたのみならず、外国の人々からも多くの注目を集めてきた。夏目漱石が帝国大学在学中、英文学科の教授であったディクソン (James Main Dixon) の依頼により『方丈記』の最初の外国語訳として英訳を行ったことはよく知られている。また、ディクソンは、漱石の英訳を下敷きにして長明とワーズワースを対比した論文を執筆し、独自に『方丈記』の英訳も試みた。この二人の取り組みをきっかけとして、この作品は海外においても認識されるようになった。従って、『方丈記』に対する漱石とディクソンの持ったイメージは、国内外におけるこの作品の受容史を検討する上で重要な意味をもつと考えられる。

本稿ではこの二人の執筆した論文を中心に、国内外の英語文献から『方丈記』に関する言説の分析を行い、その受容に関する理解を深めることを目的とする。そこから漱石の英訳以前において既に英語をはじめ外国語の文献の中でこの作品が言及されていることが判明した。漱石に英訳を依頼したディクソンは、西洋の人々の中で初めてこの作品に強い関心を持ったと言えるが、より具体的に彼は『方丈記』に描写された隠者ないし孤独さといった主題に注目したと思われる。また、ディクソンの研究発表や当時の学会議事録から、西洋の人々はキリスト教の道徳的価値観の視点から鴨長明の行動を理解しようとしたものと考えられる。さらに漱石のエッセイとディクソンの書いた論文の関係についても検討をすると、ディクソンは漱石のエッセイから多くの内容を自身の論文に取り入れたこともわかった。

キーワード: 方丈記、夏目漱石、英訳方丈記、方丈記の受容、漱石と方丈記、ジェームズ・ディクソン、西洋における方丈記の受容

はじめに

第一章 デイクソンと『方丈記』の出会いの経緯について

第二章 明治初期における西洋人の長明像

第三章 漱石の「エッセイ」とデイクソンの「論文」をめぐって
おわりに

はじめに

『方丈記』は成立して間もないころから色々な形で受容されてきた。既に中世において鴨長明の隠遁生活への関心や仏教的な無常思想など、この作品に描かれた様々な要素を意識した作品が生まれている¹⁾。近世にはその注釈書もいくつが出ており、日本の知識人の間でずっと親しまれてきた文学作品の一つである。ただし、『方丈記』が日本人のみに愛読されてきたかと言うと決してそうではない。明治期の資料を見ると、早くから外国人もこの作品に関心を寄せてきたことがわかる。よく知られているように、夏目漱石は帝国大学在学中、英文学科の教員であったデイクソン (James Main Dixon、1856–1933) の依頼により『方丈記』の初めての外国語訳を行った²⁾。それには *A Translation of Hojio=ki with a Short Essay on It* (1891年12月) という題名が与えられ、また、『方丈記』の英訳 (「Hojio=ki」) と、長明に対する独自の考えをまとめたエッセイ (「A Short Essay on It」: 以下エッセイと表記する) が記された³⁾。漱石の英訳の最初の読者であったデイクソンは、これをもとにして1892年2月に *Chōmei and Wordsworth: A Literary Parallel* (以下「論文」と表記する) 及び *A Description of my Hut* という『方丈記』の英訳を独自に試みた⁴⁾。日本文学史で高く評価されてきた『方丈記』を初めて本格的に外国に発信するにあたって、漱石とデイクソンが抱いた『方丈記』や長明に対するイメージは、この作品の国内外における受容史を検討する上で重要な意味をもつと考えられるが、それを解明しようとした研究は少ない。漱石の『英訳方丈記』を研究対象とする数少

ない先行研究のなかで下西善三郎氏の諸論文は最も詳細なものである⁵⁾。1983年に出された「漱石と『方丈記』」という論文は、漱石の執筆したエッセイを中心に論じており、そのなかで漱石の論じた独特の「文学論・作家論」をはじめとして、漱石がいかに自身のイメージを鴨長明のなかで見つけ出そうとしたかを示した。次に1990年に執筆された「夏目金之助の英訳『方丈記』に使用せる本文—漱石と方丈記 (二)」は、先行研究を踏まえて漱石が英訳のために『流水抄』及び『新注方丈記』の二著を底本にしたという重要な指摘をした。1994年に出された「漱石「方丈記小論」私注 (一)」、「漱石「方丈記小論」私注 (三)」及び「漱石「方丈記小論」私注 (四)」の一連の論文では、漱石のエッセイの詳しい注解と考察がなされた。「私注 (一)」では、主にデイクソンから漱石への翻訳依頼の諸問題が取り上げられている。「私注 (三)」と「私注 (四)」では、英文のエッセイの和訳及び注解が詳しく施され、漱石が指摘した「自然と人間」の問題などが論じられている。特に「私注 (四)」では、漱石のエッセイに含まれている長明の短い伝記に関して、それは漱石の文学そのものに対して示した考えであり、作品を理解する上で作者の伝記が重要ではないという漱石のテキスト論的な主張が見られると指摘されている。同時に、漱石のエッセイの大部分を占める独自の文学思想についても、帝国大学におけるデイクソンの文学の教え方に不満を抱いていた漱石からデイクソンへのちいさな反発として読み取れることが指摘されている⁶⁾。

下西氏以外に漱石の『英訳方丈記』に着目し

た別の研究として、今西順吉氏の『漱石文学の思想—自己形成の苦悩 第一部』が挙げられる。本書において今西氏は、作家になる前の漱石について検討するなかで、漱石が示した『方丈記』の独特な批評を取り上げ、特に漱石が問題とした「天才論」を当時の英文学との比較を通じて考察を行っている⁷⁾。また、増田裕美子氏は、「夏目漱石と『方丈記』」という講演記録のなかで、学生時代の漱石の『方丈記』英訳の影響が、『倫敦塔』や『草枕』等彼の作品にも見られ、漱石にとって長明の生き方は理想的なものであったと主張している。なお、漱石とディクソンの関係について、漱石のエッセイの内容はディクソンの講演内容に反映されていないと指摘している⁸⁾。また、『方丈記』の代表的な英訳を取り上げて、その比較検討を行ったものと、ディクソンの伝記を中心に論じた研究も複数ある⁹⁾。しかし、これらの先行研究では漱石とディクソンとの関係、ないしディクソンと『方丈記』との関わりについては、詳細に述べられていない。

以上を踏まえて、本稿ではまず、ディクソンと『方丈記』とがどのように出会い、どのような背景において漱石にその英訳を依頼したのかを明確にする。

第一章 ディクソンと『方丈記』の出会いの経緯について

ディクソンが漱石に『方丈記』の英訳を依頼した経緯について、小宮豊隆は1891年(明治24年)12月8日、大学二年生の12月に、ディクソンから頼まれて漱石が『方丈記』を英訳したと指摘している¹⁰⁾。しかしディクソン自身がどのように『方丈記』と出会い、その英訳を頼むことになったのかについては明確でない。この点について検討する。

ディクソンは、1880年1月から帝大工部大学の英語・史学の教員として勤め始め、12年近く日本で英語・英文学を中心とした教員活動を行った。彼は、日本滞在中に数多くの学問的な業績を残し

たが、日本文学に関係するものとしては、先に示した『方丈記』の研究のみであり、いずれも漱石の「英訳方丈記」を基に書かれたものである。また、彼の執筆した著書・論文などを見る限り、原文資料を用いて行った研究が少ないことにも着目できる。このことを踏まえれば、彼が『方丈記』と出会ったきっかけは、外国語で著された書物に触れたことであると推測されよう¹¹⁾。

そこで、ディクソンが漱石に『方丈記』の英訳を頼んだ1890年後半までに欧米諸国で刊行された英語資料の中で、本作品に関する言説についてみてみたい。最も古いものとしては1874年に米国で出版された*The American Cyclopaedia: A Popular Dictionary of General Knowledge*における第9巻の「JAPAN」の項目のなかで『方丈記』への言及が見出される¹²⁾。これは明治期の日本研究分野で活躍したアーネスト・サトウ(1843–1929)によるが、『方丈記』が文学作品として高い評価を得ているわけではない。またこの百科事典以外にも『方丈記』に言及した外国語の資料はいくつか見られるが、これらの資料においても、『方丈記』は必ずしも高く評価されていない¹³⁾。これらのことを考えると、ディクソンがそれらの研究から『方丈記』への関心を持ったと考えにくい。

一方、ディクソンと『方丈記』との出会いを理解する上では、バジル・ホール・チェンバレン著*Things Japanese*(日本事物誌)に注目すべきであると考え¹⁴⁾。この著書は、1890年に出版され、外国人の読者から注目を集めたため、翌年6月以降、数十年にわたってその改訂版が刊行された。その中で、『方丈記』について以下のように説明がなされている。

日記文学の中では『方丈記』が、日本文学を研究する者のもっとも興味を感じずる作品であろう。『徒然草』と同じように、これもまた仏僧〔鴨長明〕の執筆したものである。著者はその時代の色々な災難を述べ、無常の世の中

で送った以前の生活とくらべて、隠遁生活が勝っていることを詳しく説いたものである。これは一二〇〇年ごろの作である¹⁵⁾。(下線は引用者による。以下同様)

チェンバレンは、『方丈記』を日記という作品ジャンルの代表作として類別した上で、そのカテゴリの中で最も面白い作品であると紹介し、高く評価した。また、この著書の出版時期は、ディクソンが漱石に英訳を頼んだ時期と重なる。加えて、ディクソンはチェンバレンと個人的な関係を持っていたことが知られており、両者のやり取りを通じて『方丈記』への関心を持ったことも考えられる。

他方、漱石に英訳を依頼するまでに『方丈記』に強い関心を示した背景にはどのようなことがあったのか？ 一つには、ディクソンの帝国大学における教員活動が挙げられる。例えば、英国文学の授業で英国詩人と鴨長明の比較検討を行ったことは考えられる。ワーズワースなど英国の自然主義詩人を紹介する際に、日本の代表的な自然主義かつ隠遁生活を送った文人である長明や兼好などにも着目し、東西の自然観・隠遁思想を比較するために、『方丈記』の英訳を頼んだというような背景が想定できる¹⁶⁾。推測を重ねるならば、ワーズワースの*The Prelude* (序詩)や未完成作品*The Recluse*など作品における主要なテーマの一つである「孤独生活」を紹介する過程のなかで、ディクソンは長明や『方丈記』に関心を持ち始め、ワーズワースの自然観・孤独思想と長明のそれを比較すべく、漱石にその英訳を頼んだのではないかと思われる。長明とワーズワースの比較について、ディクソンはこう述べている。

それ故、山へ退き、山岳・小川等生命・無生命的な自然と交流を求めた12世紀の日本の文人に関して知るや否や、直ちに我々の自然崇拜の第一人者と比較しようと思った。私は、

そのため長明をライダル・マウントの詩人と結び付けたのである。両者は隠遁者であり、自然の大崇拜者で、それぞれは自然に対する感受性の強い精神を持っていた¹⁷⁾。

この引用文からも明確なように、ディクソンはワーズワースのように自然を鑑賞する日本の隠遁生活を送った文人について知識を得るとすぐに、その比較を試みたと述べている。つまり、『方丈記』の内容というよりも、ワーズワースと似たような孤独な性格を持つ12世紀の日本の文人に注目し、『方丈記』の英訳を通じて両者の比較を試みようとしたのであろう。

また彼が『方丈記』に関心を抱いたもう一つの要因として、ディクソンの敬けんな宗教観が考えられる。彼は大学で英文学・哲学とともに神学を勉強し、日本滞在中に本郷にあった教会で布教活動を行った記録もある。渡米した後も、メソジスト協会から刊行された雑誌の編集長や、メソジスト監督教会によって設立された大学の学長も一時的に務めた¹⁸⁾。彼が敬けんなキリスト教徒であったことは確かであり、このような宗教観によって彼は『方丈記』へ興味を強めたと思われる。以上のことを鑑みると、キリスト教において長い間続いてきた修道士習慣などに興味を持っていたディクソンが、『方丈記』の主題である「隠遁生活」について詳細な知識を得たいと考え、漱石にその英訳を頼んだことが示唆される。東洋の隠遁者である長明を西洋のそれと比較する前に、彼はヨーロッパにおける隠遁習慣の歴史を出発点にしており、ヨーロッパの場合はルソーが活動した18世紀の終わり頃まで、12世紀の日本と同じく隠遁習慣は宗教心と深く関わっていたと述べている¹⁹⁾。このことから、ディクソンは、『方丈記』のなかに描かれる12世紀の隠者の話や、その作品に見る東洋の宗教的な要素を研究対象とし始めたことが推測される。

上記の通り、西洋人として『方丈記』を初め

て英訳し、論文を書いたディクソンはチェンバレンの書物を通じて『方丈記』と出会ったが、帝大の教員活動や自身の宗教的な思想の中で鴨長明に強い関心を持ち始めたと考えて良いであろう。さらに、ディクソンは、鴨長明とワーズワースを比較した論文も執筆して、日本亜細亜協会と主として外国人を対象にその発表を行い、『方丈記』を紹介した。『方丈記』の西洋における受容を理解するために、その参加者たちが長明をいかに捉えたかという点を解明することも重要であると考えられる。次章では、この点について検討を加えたい。

第二章 明治初期における西洋人の長明像

西洋人として初めて『方丈記』に強い関心を寄せたのが、漱石を指導したディクソン教授で、1892年2月10日に日本亜細亜協会にて *Chōmei and Wordsworth: A Literary Parallel* という論文と、*A Description of My Hut* という英訳を発表した。その発表会の後に行われた議論の記録が協会会報の議事録に残されており、そこから『方丈記』ないし鴨長明に関して、西洋人の参加者がどのような理解を示したのかを読みとることができる²⁰⁾。その会議の司会を務めたのが、日本亜細亜協会の副会長のG.W. Knox (ジョージ・ウィリアム・ノックス、1853-1912) 博士で、彼はディクソンにより試みられた東西の自然観の比較研究を踏まえ、次のようにコメントした。

東洋の自然観は我々のそれと多く異なり、この地域に長く住めば住むほど、その根本的な相違に直面する。彼らにとって自然は、万華鏡のように絶えず変化するものであった。長明は、その教訓が正義・慈善に欠けているとして、かつての儒学派の作者たちに、ただの優美主義者として強く批判されている。自然に対する彼の態度は確かに非常に狭いものであった。これは日本文学全般についても言えるのであろう²¹⁾。

ノックスは長期間にわたって日本で宣教活動に従事しながら、一時的に帝大の哲学科で教師として活動した。彼は1892年1月20日に江戸時代における日本の儒学について *A Japanese Philosopher* という論文を日本亜細亜協会にて発表しており、その中では儒学者の室鳩巢著『駿台雑話』の部分的な英訳も示した²²⁾。その英訳の中に吉田兼好や西行法師など中世期の仏徒を批判した記述がある。室鳩巢など江戸期の儒者たちが、仏教が提唱する遁世習慣に対して批判的な見解を示し、人間としての社会的な責任を果たしながら精神的な真理に近づくのが大事であると主張していた点に、ノックスは着目していた。ノックスの発表の中で、『方丈記』や長明に関する言及はないが、同じ中世期の隠遁者である兼好や西行と同様に、長明も江戸時代の儒学者たちにとってはただの数奇者であり、その教えが正義・慈善に欠けていたと考えられたために、上記のような指摘を行ったのであろう。換言すれば、ノックスはプロテスタント的な視点から、ワーズワースなど西洋の文人たちが、世の中で世俗的な生活を送りながらも本当の意味での隠遁者であったことを主張し、それに対して人間界を背けて物理的自然へ逃げた長明の行動を批判して、「ワーズワースの自然や孤独者として人間に対する態度は長明のそれとあまりにも異なっている」とコメントしたのである²³⁾。

議事録においては、発表会の参加者の一人である米国人のAlexander Tison (アレキサンダ・タイソン、1857-1938) 教授のコメントについて、以下のような記録が残されている。

タイソン教授は、発表された論文に示された(筆者注：世間に対する)無関心にびっくりした。本発表内容は、彼をエマーソンの指摘した英国詩人の教え一何事においても問題としない—ことを思い出され、ルソーの事も思い出された²⁴⁾。

タイソンは1889-1894年の初め頃まで帝国大学の法学科で英語・政治学を教えた²⁵⁾。アメリカの有名な思想家・哲学者のラルフ・ウォルド・エマーソン（1803-1882）は、よく知られているように、評論*Nature*（1836）やその他のエッセイに人間と自然の関係を主題として、自然を鑑賞するために孤独さが必要であると主張した²⁶⁾。ディクソンの発表を聞いたタイソンは、「エマーソンの指摘した英国詩人」のことを思い出したと記録されているが、この「英国詩人」とはワーズワースのことであろう。エマーソンは、ワーズワースの思想から大きな影響を受けたが、その一方、ワーズワースの自然観やその詩に対する批判的な見解も示した。1833年にヨーロッパを旅行したとき、エマーソンはワーズワースと出会い、その際「一般の人々の間では『ティンターン修道院上流数マイルの地で』が人気であるが、実際に『逍遙篇』(*The Excursion*, 1814年)やソネットの方がずっと素晴らしい作品ではないか」とワーズワースに尋ねたという記録がある²⁷⁾。エマーソンにとってワーズワースの最も重要な作品は『逍遙篇』である。これは、『逍遙篇』の主題である「孤独さ」が、エマーソン著*Nature*の主なテーマでもあるということを考えれば当然である。ただ、孤独さに対するそれぞれの考えは多くの点で異なり、エマーソンの日記の記録からもわかるように、彼は『逍遙篇』の登場人物はあくまで逃避者のようなものであるとして、批判的に捉えている²⁸⁾。タイソンはかつて同じハーバード大学を卒業したエマーソンがワーズワースを批判的に捉えたことを踏まえ、上述のような指摘を行ったものと考えられる。また、タイソンは長明の隠遁生活がルソー（1712-1778）の隠遁生活にも重なるという見解を示したのである。ルソーは、よく知られているように、著書の『エミール』に過激思想が含まれていたために逮捕状が出され、亡命したことで、死去するまで孤独な生活を送ることになった。タイソンにとって、社会から亡命せざるを

得なくなったルソーの孤独生活と、京の郊外・日野山で長明の送った隠遁生活は同じようなものであったため、そのような行動を批判的に捉えた。即ち、タイソンは、西洋の隠遁思想や自然観を基準として『方丈記』に描写される鴨長明の行動を評価したディクソンの考え方に賛同し、ワーズワースの自然観はより根本的なものであったという理解を示したことがわかる。

先に示した通り、ディクソンはチェンバレン著『日本事物誌』を通じて『方丈記』に出会い、尊敬していたワーズワースを長明と比較するため、漱石にその翻訳を頼んだ。そして、彼はワーズワースの孤独思想や自然観に主眼を置き、それにもとづき長明の思想の評価を試みた。また、ディクソンの発表を聞いた日本亜細亜協会における西洋人の参加者たちも、彼のいわゆるオリエンタリズム的な考えに賛同し、長明を西洋という枠組みから理解しようとしたのである。それと同時に、漱石のエッセイを下敷きとして作成されたディクソンの論文は、従来の仏教思想や災害を描写する文学作品の観点とは全く別の次元から、即ち、自然観という新しい視点から『方丈記』の理解を試みたのであり、そのことは本作品の受容史の検討において重要であると言える。そこで次に、漱石の書いたエッセイとディクソンの論文の関連性について以下で検討してみたい。

第三章 漱石の「エッセイ」とディクソンの「論文」をめぐって

ディクソンは、漱石のエッセイと『方丈記』の英訳をもとに長明とワーズワースの比較研究を行った論文を書いた。また、漱石の英訳に言語的な表現の面で若干の修正を施し、新たに『方丈記』の英訳を出したが、内容面において、それは漱石の英訳とほとんど変わらないものであった。これに対して、その論文と漱石が書いたエッセイとの関連はどうであろうか。下西善三郎氏は、これについて以下のように述べている。

ディクソンにとって、漱石の提出物（「英訳」と「小論」）は、「英訳」のみがおもんじられた、ということをしめしていよう。じっさい、漱石訳の撰取・模倣によってなったかとおもわせるディクソン訳という事情に比すれば、「A Short Essay」は、ディクソンの講演内容に影響をおよぼしてはいない。ということも、ディクソンにおける「方丈記小論」の軽視（ないし無視）的態度がみてとれよう²⁹⁾。

氏によると、ディクソンは漱石の英訳を取り入れ、模倣していることを指摘する一方、漱石の書いたエッセイはディクソンの論文にほとんど影響を与えていないことである。しかし、漱石のエッセイとディクソンの論文の内容をよく見比べながら観察してみると、ディクソンの論文は、漱石のエッセイからも多くの内容を取り込んで、それを下敷きにして自らの考えを展開していることが分かる。長明の伝記的な内容はもちろんのこと、それ以外にも、漱石のエッセイで特に注目されている長明のmisanthrope（人間嫌い）の性格や長明の「霊なき自然観」などの内容を取り入れた上で、ワーズワースの自然観のテーマに沿った論述を示していることが読み取ることができる。

ディクソンは、漱石が書いたエッセイを『方丈記』の英訳の「イントロダクション」として利用した。ディクソンの論文の冒頭には、注釈として以下のような文章が付け加えられている。

この英訳の原案作成や翻訳及びまえがきにおける詳細な説明については、帝国大学英文学科の学生夏目金之助の価値ある支援に対する恩恵を示さなければならない³⁰⁾。

このように、漱石のエッセイはイントロダクションとして位置付けられる一方で、ディクソンはこのエッセイから自分の論文の主旨に合う内容を多く取り入れていたことがわかる。先にも触

れた通り、ディクソンは、ワーズワースと長明の自然観・隠遁思想を比較することを目的としており、それを実現するために漱石に英訳を依頼したと考えられる。ディクソンの論文題目からも明白であるが、ワーズワースと長明の比較は彼の論文の中心的なテーマであり、このような比較研究を考え出したきっかけは、孤独な生活や自然への憧れが両者の間で共通していたことにある。ディクソンは、19世紀の英国の自然主義詩人であるワーズワースの自然への強い憧れや自然の中での閑居生活への願いと似たような思想を持つ12世紀の日本の文人について知るや否や、すぐにでも両者を比較したくなったと述べている。ここで大事なことは、孤独さや自然観を基準にして両者を比較する考えは、ディクソンが漱石のエッセイに着想を得たということである。と言うのは、漱石はエッセイで長明の隠遁生活と自然観を主なテーマとして取り上げており、特に、長明の自然観について、ワーズワースの自然観の水準まで達していなかったと批判している。漱石は「我々は、ワーズワースの如く、自然の中に魂の存在を意識しない限り、人間より自然の方を好まないのである³¹⁾」と書いているので、ディクソンは漱石がエッセイで取り上げたテーマを参考にしたことが分かる。

ディクソンは、漱石の取り上げた長明の自然観や隠遁生活のテーマのみならず、漱石の示した人間嫌い論もそのまま取り入れている。ディクソンは次のように書いている。

ワーズワースの世間に対する態度は、測り知れないほど同情的かつ親切である。（中略）勿論、彼は都会生活から離れ、都会の騒音とあわただしさを嫌っていたが、彼は人類の苦しみと闘いに無関心ではなかった。彼はきっと、長明のこのような世間に対する無関心さを動物的な態度として否定していたであろう³²⁾。

ディクソンのこのような記述は、長明の人間嫌

いの性格について言及した漱石の影響に他ならない。なぜなら、『方丈記』に長明の人間嫌いの性格を示すような記述は一切なく、漱石が参考にした『方丈記流水抄』及び『新注方丈記』にもこのような注釈はない。また、『方丈記』を参照したと思われる作品の中でも、長明の人間嫌い性格についての指摘は見当たらない。『文机談』(1272年)や『十訓抄』(1252年)のように、長明が望んでいた禰宜職に就くことが出来ず、絶望して世を背けたという批判的な視点を示した作品は見られるものの、長明が人間世界を嫌いであったために出家したという指摘を行った作品も存在しない。即ち、長明の「*misanthrope* (人間嫌い)」の性格はそれ以前にはなかった漱石独自の新たな解釈であると思われる³³⁾。この解釈は、漱石が西洋の文学の影響を受けたことと関係していると考えられるが、それを受け継いだデイクソンも上記引用に見る通り、長明とワーズワースとの対比を行った上で、前者の人間嫌いの性格を批判し、その自然観がワーズワースのそれよりも劣っていたと述べた。さらに、漱石は長明の自然観を批判しているが、その痕跡もデイクソンの論文に見られる。

長明の自然観についてデイクソンは、「また、花と木に対する長明の態度は、大枝と花の曲線や色相のみを楽しむ現代の耽美主義者と似ている。彼は、「帰るときしばしば、美しい桜の枝・紅葉や木の実に恵まれ、それらを佛に奉ったり、あるいは、自ら使う、と記している」と述べた上で、旧約聖書の『創世記』にある「カインとアベルの話」の主人公であるカインの行動を長明のそれと比較している³⁴⁾。デイクソンは、漱石が指摘した長明の物理的な自然観(漱石の言う「霊なき」自然観)に賛同し、長明が仏に捧げた桜や紅葉、わらびや木の実の行為がもたらす効果についても疑問を抱いている。漱石は、長明が無生物的な自然(*inanimate nature*)への憧れを持っており、ワーズワースのように自然に「魂」を見出そうとしなかったことから、単

に物理的な自然に関心をもっていたにすぎないと指摘している³⁵⁾。デイクソンも、上記引用の通り、長明の自然に対する態度について、物理的な自然に興味を持っていただけであると言及している。実は、デイクソンが、漱石よりさらに一歩進んで、花木に対する両者の態度を比較している。長明は遠足から帰るとき「桜をかり、もみちをもとめて」いた行為に対して、ワーズワースは花や木にも他の生物と同じく「魂」があるとして、花や木の小枝を折らないようにしていたと述べて、長明の自然観を批判している。ここにも明らかに漱石のエッセイの影響が見られる。また、デイクソンは、『方丈記』の「かへるさにハ折につけつつ桜をかり、(中略)且は仏にたてまつり、かつは家づとにす。」の部分の問題にし、カインは旧約聖書の神エホバに自分が耕した農地からの収穫物を捧げたにも関わらず、心が濁っていたため、エホバはその奉納を受け取らなかったが、それと同じく、長明が途中で採った桜や紅葉を仏に奉納したとしても、仏がその奉納を本当に受け容れるのかどうかは分からないと指摘した。要するに、キリスト教的な神学及び道学を勉強したデイクソンは、旧約聖書などキリスト教の聖典から類似する事例を引用し、ピューリタンの道徳的価値観の視点から12世紀の東洋の隠遁者の解釈を提示したと考えられる。

このように、漱石の理解に基づく長明像を受け継いだデイクソンの論文は、漱石のエッセイから多くの内容、特に長明の隠遁思想・自然観についての内容を取り入れていることがわかる。彼は漱石のエッセイを無視ないし軽視することなく、自らの論文の主旨であった「ワーズワースと長明の自然観」に関する内容を漱石のエッセイから取り入れている。このことは、デイクソンの論文が「日本ほど美しい自然に恵まれた国は少なく、日本国民もその自然の贈与を無視してきたわけではない。」という記述を出発点として展開されていることから明らかである

う³⁶⁾。上記の通り、ディクソンが漱石のエッセイから様々な事柄を取り入れたことは確かであるが、漱石はディクソンの希望に沿って書いた可能性も否定できない。

おわりに

本稿では、『方丈記』が明治期においてどのような過程を経て外国人研究者に受容されたのかについて検討を試みた。この研究を通じて、まず、漱石が行った『方丈記』の最初の外国語訳の前にも、欧米の英語資料で本作品についての言説があることが判明した。西洋人のなかで『方丈記』を文学作品としてはじめて高く評価したディクソンは、チェンバレン著『日本事物誌』をきっかけに本作品に関心を強く持つようになったと考えられる。ディクソンは、『方丈記』における隠遁者の描写を重要視し、東西における隠遁習慣の比較を行う目的で、漱石にその英訳を依頼したと推測される。そして、日本亜細亜協会で長明とワーズワースの比較を行った論文を発表するとともに、新たに『方丈記』の英訳も行った。この作品が西洋に次第に広まる上で、ディクソンのこのような試みは重要な意味を持つものであった。しかし、明治期における西洋の読者は、仏教的な要素を持つ作品、あるいは災害を描く作品としてではなく、西洋のロマンス主義的な自然観を描く作品として理解しようとした。これは、『方丈記』の従来一般的な読み方とは異なり、新しい理解の試みであったといえる。

一方、漱石は、英文学者・古典文学者としてあまり高い評価を受けてこなかったが、日本の古典文学作品が海外に発信されていく過程において、大きな役割を担ったといえる。漱石のエッセイは、ディクソンの論文や『方丈記』の英訳に大きな影響を与えたことを理解できる。

以上でみてきた漱石とディクソンの取り組みをきっかけに、『方丈記』は国外においても文学作品として認識されるようになり、それ以後、アストン博士をはじめとして、ディキンズ（南

方熊楠と共著）など多くの研究者により何度も翻訳されるようになった。『方丈記』の海外における受容において、この二人が中心的な役割を果たしたことが明らかになったが、彼らの抱いた『方丈記』のイメージが後世にいか理解され、その後の研究にどのように影響を及ぼしたのかを探ることが、今後の課題である。

注

- 1) 『方丈記』より影響を受けたとされる主な作品の概略に関しては、今村みゑこ「略本・流布本『方丈記』を巡って：一条兼良のこと、及び享受史のことなど」（東京工芸大学女子短期大学部 飯山論叢14 (2)、1997-01-25、169-146頁）が詳しい。
- 2) 漱石の『方丈記』英訳では五大災厄の内容が部分的にしか訳されていないが、本作品の外国語訳としては最初である。『方丈記』の西洋諸言語への翻訳に関しては、幣原道太郎「方丈記の欧訳」（駒沢大学文学部、1961年）が詳しい。ただ、この論文はDonald Keeneの英訳（1955年）までしか言及していない。Keeneの英訳の後、Helen Craig McCulloughの*Classical Japanese Prose: An Anthology* (1990)、Burton Watsonの*Four Huts* (2002)、Yasuhiko Moriguchi・David Jenkinsの*Hojoki, Visions of a Torn World* (1996)、Anthony H. Chambersの*An Account of a Ten-Foot-Square Hut* (Hōjōki, 1212) 及びMeredith McKinneyの*Essays in Idleness and Hojoki* (Penguin Classics) (2013)などが存在する。
- 3) 『漱石全集 第26巻』（岩波書店 1996年）収録の“A Translation of Hojio-ki with A Short Essay on It”, 124-146頁を参照。
- 4) Dixon, James. Main., “Chōmei and Wordsworth: A Literary Parallel”, “A Description of My Hut”, *Transaction of Asiatic Society of Japan* (以下TASJと表記する), Vol. XX (1892), 193-215頁を参照。
- 5) 下西善三郎による漱石の『英訳方丈記』に関する諸論文は次の通りである。「漱石と『方丈記』」（『金沢大学国語国文』21、1983、86-87頁）、「夏目金之助の英訳『方丈記』に使用せる本文一漱石と方丈記（二）」（『深井一郎教授退官記念論文集』、1990、164-174頁）、「漱石「方丈記小論」私注（一）」（*日本語と日本文学*20、1994、1-11頁）、「漱石「方丈記小論」私注（三）」（*上越教育大学研究紀要*13 (2)、1994、243-253頁）、「漱石「方丈記小論」私注（四）」（*上越教育大学国語研究*8、1994-02、1-14頁）、「古典文学の受容における漱

- 石・龍之介の位置」(上越教育大学研究紀要23(2)、2004、1-13頁)。
- 6) 現存する漱石の記述において、ディクソンに関する言及は『私の個人主義』の中でしか見られないが、そこで漱石はディクソンの英文学の教え方に不満を感じていたことを述べている。詳細は、夏目漱石『私の個人主義』(『夏目漱石全集』岩波書店、第11巻、1996年、440-441頁)を参照。
- 7) 今西順吉『漱石文学の思想 第一部』(筑摩書房、1888年、231-238頁)。
- 8) 増田裕美子「夏目漱石と『方丈記』」(磯水絵編『今日は一日、方丈記』(新典社、2013年)、94-107頁)。
- 9) 『方丈記』の英訳の比較研究について、次のような研究が挙げられる。矢部義之「語発想法の比較研究：ドナルド・キーンと郡山直による方丈記の英訳に関して」(亜細亜大学教養部紀要5、1970年、112-93)、森川隆司「英訳方丈記—漱石、ディクソン、そして熊楠」(工学院大学共通課程研究論叢(30)、1992年、125-136頁)、松岡信哉「英語訳『方丈記』比較研究：比喩表現と語法の問題について」(龍谷大学大学院研究紀要、人文科学19、1998年、51-62)、松本寧至「夏目漱石英訳『方丈記』をめぐって：漱石と長明」(大学院紀要13、1999-03、3-26頁)、坂本文利の「『方丈記』序段の英訳についての一考察—漱石・熊楠・キーン 比較の試み—」(大分大学、国語の研究28、2002年、21-30頁)。
- また、ディクソンを論じる代表的な研究は次の通りである。小澤・土橋・鈴木・梅津著「ジェイムズ・メイン・ディクソン」(『近代文学研究叢書』第三十五巻、1972年、320-367頁)、塚本利明・久泉伸世著「James Main Dixon伝補遺」(『比較文学』(32)、1989年、89-123頁)。
- 10) 小宮豊隆著『夏目漱石』第一巻(岩波書店、1953年、204頁)。漱石の「英訳方丈記」の依頼の問題に関して、前掲注5の「漱石「方丈記小論」私注(一)」が詳しい。
- 11) ディクソンは、日本滞在中に英語、英文学、キリスト教など様々な分野に関わる著書・エッセイ・論文・講演記録などを残しているが、日本文学に直接関係する資料は管見では存在しない。なお、彼の最も有名な著書には、『Dictionary of idiomatic English phrases』や『English Lesson for Japanese Students』のような英語教育の書物などがある。
- 12) Ed. George Ripley and Charles A. Dana, *The American Cyclopaedia: A Popular Dictionary of General Knowledge*, Vol 9, Revised 2nd Ed., D Appleton and Company, New York, 1874.日本に関する記事は529-564頁で、『方丈記』の言及は560頁にある。
- 13) 例えば、一三服部の地震研究に関する論文や*The American Cyclopaedia*から記述内容を参照したと思われるフランス語の百科事典*Nouveau dictionnaire encyclopédique universel illustré: répertoire des connaissances humaines*にも『方丈記』への言及は見られる。しかし、ディクソンがこれらの資料をみた可能性は低い。詳細は、Hattori, Ichizo, "Destructive Earthquakes in Japan", TASJ, Vol. 6. Part. 2 (1878), pp. 249-75、Trousset, Jules, *Nouveau dictionnaire encyclopédique universel illustré: répertoire des connaissances humaines*, Vol. 3, pp. 256, 1885を参照。
- 14) Chamberlain, Bail Hall, *Things Japanese—Being Notes Various Subjects Connected with Japan for the Use of Travellers and Others*, Kelly and Walsh Limited, Yokohama, 1890, pp 269-70.また、*Things Japanese*は読者から人気を集め、数十年にわたって改版を重ねたが、『方丈記』の描写に関しては、特に内容の変更は見られない。
- 15) チェンバレン著、高梨健吉訳『日本事物誌』平凡社〈東洋文庫131〉全2巻、1969年、第1巻、32頁。原文は「Of these the Hojoki is probably the one which the student will find most interesting. Like the Tsurezuregusa, it is the work of a Buddhist monk. The author describes the calamities of his times and expatiates on the superiority of life in a hermit's cell to that which he has previously led amidst worldly vanities. It dates from about the year 1200」。同上、269-70頁を参照。
- 16) 『方丈記』英訳の9年前1883年に試みられた『徒然草』の英訳の場合も、翻訳者であったカナダのメソジスト協会の宣教師C.S. Ebyも、『徒然草』の中で見られる隠遁者の描写や宗教的な要素によって興味を持ち始めたようである。詳細は、Eby, C.S. "Meditations of a Recluse: A Translation of Tsuredzure Gusa", *The Chrysanthemum*, Vol. 3 (1883), pp. 87-90を参照。
- 17) 和訳は筆者による。英文は「When, therefore, we find a Japanese literary character of the 12th century retiring to the hills and seeking communion with the mountains, the streams, with animate and inanimate life, we at once think of contrasting him with our high-priest of nature. This is why I have linked together Chōmei and the

- bard of rydal Mount. Both were recluses; both were devout admirers of nature and receptive in their attitude towards nature」。詳細は前掲注4、194頁を参照。
- 18) デイクソンは1901年から1903年まで米国ミズーリ州セントルイスから刊行されていた*The Illustrated History of Methodism*という雑誌の編集者として勤め、1903年から1905年まで米国オレゴン州ミルトン市にメソジスト監督教会により新しく設立されたコロンビア・カレッジの学長を務めた。
- 19) 和訳は筆者による。原文は次の通りである。「A recluse in European countries, till Rousseau took up his abode on the St. Peter's isle in the Lake of Brienne, was always a religious devotee, a man of introspective habits who retired from the world to make up his account with his Maker.」詳細は、前掲注4、193–194頁を参照。
- 20) “Minutes of Meetings (Meeting of February 10th, 1892)”, TASJ Vol. 20 (1892), pp. vii–xを参照。
- 21) 同上。和訳は筆者による。原文は次の通り。「The Eastern attitude towards nature is wholly different from ours, and the longer one resided there, the greater was one struck by the radical divergence. Nature to them was a kaleidoscope,—a series of change without rest. Chōmei had been criticized severely by late authors of Confucian schools as a mere aesthete, in whose teaching righteousness and benevolence were absent. His attitude towards nature was certainly a very contracted one」。
- 22) Knox, G.W., “A Japanese Philosopher”, TASJ, Vol. XX, pp. 1–134.
- 23) 原文は「Wordsworth's feeling towards nature, and to man as a solitary, was wonderfully different from that of Chōmei.」。詳細は、前掲注20、viii頁を参照。
- 24) 原文は「Professor Tison has been struck by the indifferentism expressed in the paper. It reminded him of the English poet mentioned by Emerson whose teaching amounted to this—that nothing really mattered very much. There appeared also much that reminded him of Rousseau.」。詳細は、前掲注20、viii頁を参照。
- 25) Auslin Michel R, “Japan Society, Celebrating a Century, 1907–2007 (revised and updated from the original by Edwin O. Reischauer.)”, Japan Society Inc, 2007, pp. 14–24.
- 26) 酒本雅之訳『エマソン論文集 上巻 自然他6篇 略年譜』（岩波書店〈岩波文庫〉1972年）。
- 27) Emerson Ralph Waldo, ‘First Visit to England’ (1856) in “*English Traits*”, Cambridge, Mass.: Houghton Mifflin, The Harvard Classics (1909–14).
- 28) エマソンによるワーズワースの孤独さ及び自然観を批判した記録については、1828年のはじめごろの日記記録である「Notes on Poetry」や1835年8月5日の「The First Thought」などが挙げられる。詳細はEmerson Ralph Waldo, *Journals of Ralph Waldo Emerson, 1820–1824, Vol. 1–10*, Cambridge, Mass.: Houghton Mifflin, The Harvard Classics (1909–14)を参照。
- 29) 前掲注5の「漱石「方丈記小論」私注（一）5頁」を参照。
- 30) 原文は「NOTE.—For the original draft of this translation, as well as for much valuable assistance in the explanation of details in the translation and in the introduction, I must acknowledge my great indebtedness to Mr. K. Natsume, a student of English Literature in the Imperial University」である。詳細は、前掲注4、205頁を参考。
- 31) 原文は「Unless we recognise in her the presence of a spirit, as Wordsworth does, we cannot prefer her to men」と記す。『漱石全集 第26巻』（岩波書店、1996年、127頁）より引用。
- 32) 原文は次の通りである。「Wordsworth's attitude towards society was infinitely more sympathetic and kindly…（中略）No doubt he was out of touch with town life, and disliked the din and rush of the city, but he was not indifferent to the suffering and struggles of humanity and would have rejected the callous indifference of Chōmei as animalistic.」。詳細は、前掲注4、195頁を参照。
- 33) 漱石著『坊ちゃん』は、人間嫌いをテーマとした点で有名であるが、学生時代において既に、漱石が明治23年8月9日に正岡子規に宛てた書簡の中に「misanthropic病」という言葉が書かれている。詳細は、前掲注5の「漱石「方丈記小論」私注（三）」と「漱石と『方丈記』」を参照。
- 34) 原文は次の通りである。「Again, in Chōmei's attitude to flowers and trees, we find an affinity to the ways of the modern aesthete, pleased with a hue and curve of the a bough and blossom. “On my way home from the more of Amazu,” he remarks, “I am frequently rewarded by finding a

choice bough of cherry or maple or a cluster of fruit, which I offer to Buddha or reserve for my own use」。

35) 漱石は長明の自然観について、「It is an inconsistency that a man who is so decidedly pessimistic in tendency should turn to inanimate nature as the only object of his sympathy. (中略) We cannot deny that sometimes inspired by her grandeur—which however is not the case with Chōmei— (中略) …Unless we recognize in her

the presence of a spirit, as Wordsworth does, we cannot prefer her to man, nay we cannot bring her to the same level as the latter, as our object of sympathy.」と述べている。原文は『漱石全集 第26巻』(岩波書店1996年371頁)による。

36) 原文は次の通りである。「There are few countries upon which nature has lavished so much beauty as Japan, and her inhabitants have not shown themselves heedless of their privileges.」前掲注4、193頁を参照。

Reception of *Hōjōki* in Meiji Japan: With a Focus on Natsume Sōseki's English Translation

PRADHAN Gouranga Charan

Department of Japanese Studies,
School of Cultural and Social Studies,
SOKENDAI (The Graduate University for Advanced Studies)

Summary

Kamo no Chōmei's *Hōjōki* (1212) has a long history of readership. Throughout the history of Japanese literature, it continuously invited attention, not only from readers in Japan, but also from abroad. It is well known that Natsume Sōseki translated *Hōjōki* into English while he was a student at the request of James Main Dixon, his English literature professor at Tokyo Imperial University. Dixon, building upon Sōseki's translation, further authored an article comparing Kamo no Chōmei with English poet William Wordsworth, and also produced his own English translation. It is owing to the endeavours of these two that *Hōjōki* became available to readers in the West for the first time. Hence, in order to study the history of *Hōjōki*'s reception, especially its circulation in the West, the insights offered by Sōseki and Dixon are particularly crucial. With this in mind, the focus in this paper is to deepen our understanding of *Hōjōki*'s reception through a close analysis of relevant English language resources that mention this work. We have found, from our study of late nineteenth century resources, that *Hōjōki* had already appeared, albeit in fragments, in English-language literature before Sōseki's translation. Dixon was perhaps the first Westerner to show a keen interest in *Hōjōki*, and his primary thematic interest was the issue of reclusion and solitude. Also, the contents of Dixon's talk on Chōmei show that the Western audience appreciated *Hōjōki* and its author from the perspectives of the Christian cultural ethos. This paper also discusses the intertextual affinity between Sōseki's essay and Dixon's article. It demonstrates how the latter built his arguments based on the former's ideas.

Key words: *Hōjōki*, Natsume Sōseki, James Main Dixon, translation of *Hōjōki*